

氏 名・（本籍）	<small>みなみ</small> 南 <small>その</small> 園 <small>とも</small> 智 <small>ひと</small> 人 （宮崎県）
専攻分野の名称	博士（医学）
学位記番号	医博甲第867号
学位授与の日付	平成26年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	医学系研究科医学専攻
学位論文題名	Association of festival observance with psychological distress in a rural Japanese community (日本の農村地域における祭りとメンタルヘルスの関連)
論文審査委員	(主査) 教授 村 田 勝 敬 (副査) 教授 美 作 宗太郎 教授 長谷川 仁 志

学位論文内容要旨

Association of festival observance with psychological distress in a rural Japanese community.

(日本の農村地域における祭りとメンタルヘルスの関連)

申請者氏名 南園 智人

研究目的

ソーシャルキャピタルとメンタルヘルスの関連を示唆する報告が近年増えている。ソーシャルキャピタルとは、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会制度の特徴である。人々の協調行動を促すことでソーシャルキャピタルを高めることにより、社会の効率が高まる。地域社会のソーシャルキャピタルが高まることは、社会の結束力とネットワークを強化することにより、住民のメンタルヘルスに良い影響を与えると報告されている。

我々は地域のソーシャルキャピタルを検討するうえで、地域における祭りに注目した。祭りは、地域の祭礼として行われてきたが、現在は異世代間の交流、地域活性化、芸術の表現の場、伝統文化の継承などさまざまな機能をもつものとして期待されている。

我々は、これまでの日本の農村地域の研究より、祭りが異世代間の交流を通して地域の一体感と信頼感を醸成し、ソーシャルキャピタルを醸成することで、地域住民のメンタルヘルスに良い影響を与えているのではないかと考えた。先行研究では、祭りの経済的影響等の社会的側面の報告はあるが、祭りとうメンタルヘルスの関連についてはない。

本研究の目的は、日本の農村地域における祭りとうメンタルヘルスの関連について、ソーシャルキャピタルを考慮した横断調査により検討することである。

研究方法

2007年5月から6月に、秋田県の農村地域(人口：31,869人)の40～79歳の全住民17,525人を対象に心の健康づくり質問紙調査を行った。調査は、地域ボランティアの協力により調査票を全戸配布し、2週間後に回収した。40～79歳の全住民17,525人のうち、11,649人が回答した(回答率66.5%)。調査票の項目のうち、個人属性(性別、年齢、教育歴)、祭り、K6による精神的ストレス度、ソーシャルキャピタルを分析項目とした。分析項目に回答した8,729人(回答者の74.9%)を分析対象とした。

年齢は10歳毎に4区分とした。教育歴は3区分(9年以下、10～12年、13年以上)とした。祭りは、「あなたのお住まいの地域に、祭りがありますか」により質問し、「ある・ない」の2件法にて回答を得た。ソーシャルキャピタルは、「近所の人、お互いに助けあう気持ちがありますか(互助と信頼)」、「あなたは、お住まいの地域に愛着がありますか(地域への

愛着)」により質問し、「よくある・まあある・あまりない・ない」の4件法にて回答を得た。精神的ストレス度の測定にはK6尺度を用いた(0～24点)。これは合計点数が高いほど、精神的な問題がより重篤である可能性があると考えられる。K6は、9点以上を精神的ストレス度の高群とした。

統計解析として、精神的ストレス度およびソーシャルキャピタル、祭り、個人属性(性別、年齢、教育歴)との2変数間の関連をχ²乗検定および順位相関分析により検討した。また、祭りとソーシャルキャピタル2項目の間の関連も検討した。最後に、祭りと精神的ストレス度の関連を、調整しないモデル、個人属性で調整したモデル、および個人属性とソーシャルキャピタルで調整したモデルの3つのロジスティック回帰分析モデルを用いて検討した。

研究成績

対象者の構成は、平均年齢(標準偏差)59.4(10.0)才、男性46.1%、女性53.9%だった。精神的ストレス度高群の割合は11.9%、祭りがあると回答した群は76.7%であった。ソーシャルキャピタルについては、互助と信頼、地域への愛着がよくあると回答した群は、それぞれ30.2%、33.8%であった。精神的ストレス度高群は、女性、若年者、教育歴が短い、祭りが無い、互助と信頼および地域への愛着が無い群に多かった。

互助と信頼の高さと地域への愛着の高さ(Spearman's ρ = 0.49)、互助と信頼の高さと祭りがあること(Spearman's ρ = 0.20)、地域への愛着の高さと祭りがあること(Spearman's ρ = 0.17)は有意に関連した。

祭りと精神的ストレス度の関連についてのロジスティック回帰分析の結果、調整しないモデルでは、祭りが無いと回答した群は、精神的ストレス度高群が有意に多かった(オッズ比 = 1.75, 95%信頼区間 = 1.52–2.02)。個人属性で調整しても精神ストレス度高群と有意に関連した(1.71, 1.49–1.97)。さらに、個人属性とソーシャルキャピタルで調整後も有意に関連した(1.27, 1.10–1.48)。

結論

日本の農村地域において、地域に祭りが無いと回答した群では個人属性とソーシャルキャピタルを考慮しても精神的ストレス度高群が有意に多かった。地域におけるメンタルヘルス対策において、祭りの影響を考慮する必要があると考えられる。

学位（博士一甲）論文審査結果の要旨

主 査： 村田 勝敬

申請者： 南園 智人

論文題名：Association of festival observance with psychological distress in a rural Japanese community（日本の農村地域における祭りとメンタルヘルスの関連）

要旨

著者の研究は、論文内容要旨に示すように、地域住民のメンタルヘルスと住民の居住地域における祭りの存在の認識との関連を明らかにする目的で行われた。農村地域における祭りは、伝統的に地域の祭礼として行われてきたが、世代間交流の促進や地域活性化などの機能を持つことも指摘されている。一方、世代間交流の促進や地域活性化はソーシャルキャピタルと深い関連をもつ概念である。ソーシャルキャピタルと地域住民のメンタルヘルスとの関連は近年数多く報告されているが、地域の祭りと住民のメンタルヘルスとの関連についての研究はない。地域住民のメンタルヘルスの測定には K6 尺度を用い、交絡因子として個人属性の性別、年齢、教育歴を用いた。平均年齢 59 歳（男性 46.1%）の対象集団において、精神的ストレス高値者は 11.9%であり、また生活圏内に祭りが無いと回答したのは 23.3%であった。祭りはソーシャルキャピタルと有意に関連した。また、個人属性とソーシャルキャピタルを調整した多重ロジスティック回帰分析をおこなうと、生活圏内に祭りが無いと回答した群は、そうでない群と比べ、精神的ストレス高値である者の割合が有意に高かった。すなわち、祭りは、ソーシャルキャピタルと独立して、メンタルヘルスに関連することが示された。個々の祭りの特性や地域性との関連、祭りの公衆衛生学的な活用方法についての検討は今後の課題と考えられた。

本論文の斬新さ、重要性、研究方法の正確性、表現の明瞭さは以下の通りである。

1) 斬新さ

地域における祭りの意義、意味合いに関しては、経済的影響などの社会的側面が研究対象とされているものの、本研究のように精神的ストレスとの関わりについて検討した研究は殆どなく、全く新しい視点で祭りのもつメンタルヘルスにおける関連性を見出したと言える。

2) 重要性

地域住民のメンタルヘルスの水準をどのように向上させるかは公衆衛生上の課題となっている。臨床医学的な取り組み、健康教育の他、近年ではソーシャルキャピタル醸成への期待がもたれているが、本研究により地域の祭りと住民のメンタルヘルスの関連が示唆されたことは、新たな地域介入の選択肢の可能性を提示するものであり、重要性が高いと考えられる。

3) 研究方法の正確性

本研究は地域住民を対象とした横断調査結果を用いて行われた。横断研究の実施方法、およびデータの取り扱いは適切に行われている。また、分析にあたってデータの特徴をふまえた適切な手法が用いられている。結果の解釈についても当該調査の限界を踏まえた検討が行われており妥当である。以上より研究方法は適正で正確性があると考えられる。

4) 表現の明瞭さ

論文は、先行研究の課題（研究背景）、研究目的について吟味され、方法、結果を的確に記載している。また、考察も簡潔かつ明瞭に記載されている。

以上述べたように、本論文は学位を授与するに十分値する研究と判定された。